

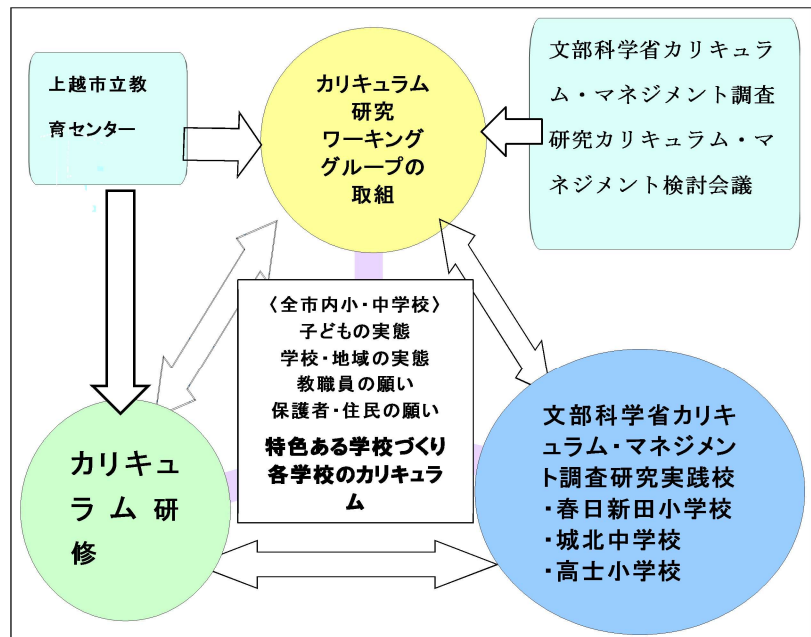
# 上越市教育委員会 令和元年度完了報告書

## I 調査研究概要

※上越市として平成19年度から取り組んでいる「上越カリキュラム」の実践と兼ねて標記調査研究を推進する。

### 1 組織の概要と取組

- 上越市は、文部科学省の標記調査研究を受け、「カリキュラム・マネジメント調査研究実践地域」として、カリキュラム研究、カリキュラム研修、カリキュラム実践校の実践及び実践発表会を通して、市内全ての学校の特色ある学校づくりの推進を支援した。
- 実践校は、下記のとおり3校に設定した。
- 文部科学省カリキュラム・マネジメント調査研究カリキュラム・マネジメント検討会議を3回設定した。そのうち、第2回を実践校の中間発表に位置付けた。



〈文部科学省委託事業を受けた上越カリキュラムの取組図〉

〈これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究上越市実践校一覧〉

実践テーマ	研究テーマ a	研究テーマ b	研究テーマ c
実践校	春日新田小学校	城北中学校	高士小学校
研究概要	<p>◆認め合い進んで学び合う子の育成 ～ステーション授業構想による集団づくり～</p> <p>◆「かかわり方課題」の日常化、一般化を図ることで、認め合い進んで学び合う学級集団づくり</p>	<p>◆各教科・領域において、SDGs（ユネスコスクールとして）、城北 UDL（ユニバーサルデザインラーニング）を視点として学習の基盤となるであろう資質・能力を明確に設定し、授業改善を図っていく。</p>	<p>◆総合的な学習の時間を中心に教科等横断的な視点により、確かな学力、豊かな心、健やかな体の育成につなげる複式のカリキュラムを創造する。</p>

2 令和元年度「これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントの在り方」に関する調査研究カリキュラム・マネジメント検討会議委員一覧(上越カリキュラム研究推進委員を兼ねる)

	氏名	所属等	役職	WG
1	小林 毅夫	元上越市教育長	指導者	／
2	安藤 知子	上越教育大学 教授	指導者	／
3	林 克巳	有田小学校 校長	委員長	／
4	佐藤 幹夫	令和元年度上越カリキュラムモデル校 城西中学校 校長	副委員長	A
5	亀山 浩	令和元年度上越カリキュラムモデル校 令和元年度～2年度文科省カリキュラム・マネジメント実践校 春日新田小学校 校長	副委員長	A
6	青山 尚子	令和元年度～2年度文科省カリキュラム・マネジメント実践校 城北中学校 校長	副委員長	A
7	閏間 久子	令和元年度～2年度文科省カリキュラム・マネジメント実践校 高士小学校 校長	副委員長	A
8	植木 厚夫	令和元年度上越カリキュラムモデル校 城西中学校 教諭		A
9	寺島 元子	令和元年度上越カリキュラムモデル校 令和元年度～2年度文科省カリキュラム・マネジメント実践校 春日新田小学校 教諭		A
10	渡邊 孝弘	令和元年度～2年度文科省カリキュラム・マネジメント実践校 城北中学校 教諭		D
11	清水 貴之	令和元年度～2年度文科省カリキュラム・マネジメント実践校 高士小学校 教諭		A
12	田邊 道行	上越教育大学 特任准教授		B

13	渡部 直樹	戸野目小学校 教諭		B
14	田口 秀行	三和中学校 教諭		B
15	若木 直弘	南本町小学校 教頭		C
16	竹田 正子	高田西小学校 教頭		C
17	水谷 桂介	雄志中学校 教頭		C
18	林 誠仁	柿崎小学校 教諭		C
19	松岡 貴徳	南川小学校 教頭		D
20	上原 進	宝田小学校 教諭		D
21	小松 祐貴	春日中学校 教諭		D
22	藤本 孝昭	教育センター 所長	事務局	/
23	品田やよい	教育センター 指導主事	事務局	/
24	藤田賢一郎	上越市教育委員会教育総務課 参事	事務局	/
25	梅澤 健一	上越市教育委員会学校教育課 指導主事	事務局	B
26	加納 雅義	上越市教育委員会学校教育課 指導主事	事務局	/

WG：ワーキンググループ A：研究モデル校、実践校のカリキュラムづくり部  
 B：「視覚的カリキュラム表®」活用部  
 C：実践収録作成部  
 D：カリキュラム・マネジメント研究部

※ワーキンググループの取組やカリキュラム・マネジメント検討会議の出席については、都合がつかない場合は校内で代理出席をしても構わない。

### 3 具体的な取組

#### (1) カリキュラム研究

- ・子どもや地域の実態、社会の動向、国や県からの要請等、特色ある学校づくりに対する受け止めと位置付けの検討(カリキュラム・マネジメント検討委員会)
- ・カリキュラム・マネジメントの在り方についての研究(視覚的カリキュラム表®の改善を含む)(カリキュラム・マネジメント検討委員会)
- ・上越市内全小学校 50 校及び全中学校 22 校によるカリキュラム・マネジメントの推進による特色ある学校づくりの推進
- ・上越市内小・中学校による視覚的カリキュラム表®の作成を通じた学校課題への対応に向けた教育課程の編成・実施・改善の繰り返し

## (2) ワーキンググループの活動

※ワーキンググループは、活動の独自性を認め、必要に応じて開催する。検討した内容、結果等は推進委員に発信する。

### A：調査研究実践校、実践校のカリキュラムづくり部

- ・調査研究実践校として、a b cのそれぞれのテーマに則り、自校の学校課題に対応した実践を構想し、実施・振り返り改善を繰り返した成果と課題を明らかにし、上越市内の学校のカリキュラム・マネジメントの推進に生かす。

### B：「視覚的カリキュラム表<sup>®</sup>」活用部

- ・「視覚的カリキュラム表<sup>®</sup>」活用研修を実施し、市内の教職員の視覚的カリキュラム表<sup>®</sup>の活用力の向上を図る。
- ・小学校における新学習指導要領全面実施に対応し、新しい教科書に対応した視覚的カリキュラム表を作成し、上越市立小学校の支援をする。

### C：実践収録作成部

- ・実践収録「上越カリキュラム「共創」」の編集を行う。実践事例等としてまとめ、市内にカリキュラム・マネジメントの取組の普及を図る。次年度の始めに市内教職員全員に配付し、カリキュラム・マネジメント能力の向上に資する。
- ・当調査研究の成果物作成に向けて、コンテンツの検討・実践の集約・編集等を行う。

### D：カリキュラム・マネジメント研究部

- ・市内の学校の動向から、現場のニーズを見いだし、現在の教育課題に合ったカリキュラム・マネジメントの在り方を研究していく。
- ・実践校の研修等に参加し、指導・助言を行う。
- ・全国の実践を調査し、当市の取組に生かせる内容を発信する。

## (3) 実践校の取組(ワーキンググループA及びD)

- a 学校の教育目標等(目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など)の設定及び実現に向けた研究：上越市立春日新田小学校
  - b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究  
：上越市立城北中学校
  - c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究  
：上越市立高士小学校
- ・ワーキンググループDによる、実践校の実践の推進に関わる研修会、会議等への参加や支援・助言

#### (4) カリキュラム研修(ワーキンググループB)

##### ①カリキュラム・マネジメントに関する研修

- ・視覚的カリキュラム表<sup>®</sup>活用研修：市内小中学校の教職員対象の研修である。視覚的カリキュラム表<sup>®</sup>の作成方法、活用方法について学ぶ。

##### ②授業づくり、マネジメント等に関する研修

- ・第2回カリキュラム・マネジメント検討会議及び実践発表会：市内小・中学校の教職員対象の研修である。カリキュラム・マネジメント実践校の取組から学び、自校の実践に生かす。

#### (5) 視覚的カリキュラム表<sup>®</sup>の作成、配付、活用(ワーキンググループB)

- ・小学校における教科用図書の採択に伴う視覚的カリキュラム表<sup>®</sup>の来年度使用に向けての改善
- ・小学校視覚的カリキュラム表<sup>®</sup>にプログラミング教育に関する内容の明示
- ・教育委員会が入っている建物である教育プラザ内における、市内全ての小・中学校各学年の視覚的カリキュラム表<sup>®</sup>とランドデザインの閲覧及びデジタルデータの集約と校務支援システムを活用した閲覧・活用

#### (6) 「これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントの在り方」カリキュラム・マネジメント検討会議

##### 第1回・委員委嘱、今年度の研究の計画について検討

- ・研究モデル校、実践校の取組方針等紹介・検討
- ・指導 元上越市教育長 小林 毅夫 様  
上越教育大学 教授 安藤 知子 様

##### 第2回・文部科学省カリキュラム・マネジメント調査研究実践校春日新田小学校、城北中学校、高士小学校の1年目実践発表、協議

- ・上越カリキュラム研究モデル校城西中学校による実践発表
- ・上越市内教職員参加
- ・指導 元上越市教育長 小林 毅夫 様  
上越教育大学 教授 安藤 知子 様

##### 第3回・今年度の取組を報告、新年度の方向を検討

- ・指導 元上越市教育長 小林 毅夫 様  
上越教育大学 教授 安藤 知子 様

⇒コロナウィルス感染症の発生に伴い、紙上(データ)検討会に変更した。

#### (7) 実践収録の作成(ワーキンググループC)

- ・実践発表会での実践やワーキンググループの研究について収録した。
- ・市内全ての教職員に配付し、カリキュラム・マネジメントの推進を図る。

(令和2年3月31日完成 4月1日に上越市内全教職員に配付予定)

(実践地域における年間実施スケジュール)

10月	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block; margin-right: 20px;">                     特色ある学校 づくりの推進 (市内小・中学校)                 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block; margin-right: 20px;">                     ワーキンググル ープの取組                 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">                     テーマ a b c によ る実践校の推進                 </div>
11月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 5日：第1回検討会議</li> </ul>
12月	
1月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 22日：視覚的カリキュラム表®活用研修</li> <li>・ 29日：第2回検討会議(実践発表会)</li> <li>・ 30日：カリ・マネ推進委員実践校県外視察(埼玉県戸田市教育委員会視察及び戸田第2小学校研究会参加)</li> </ul>
2月	
3月	<ul style="list-style-type: none"> <li>※新型コロナウイルス感染症の発生により、3月4日から市内小・中学校臨時休業</li> <li>・ 市内各校への校務支援システムを活用した来年度の視覚的カリキュラム表®の配付</li> <li>・ 11日：第3回検討会議(新型コロナウイルス感染症の影響により、紙上検討に変更)</li> <li>・ 31日：実践収録「共創」発刊：4月1日上越市内教職員への配付</li> </ul>

## II 調査研究の内容

### 1 実践校【上越市立春日新田小学校】

#### ○研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

#### ○調査研究の内容及び調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

### 学級経営を核としたカリキュラム・マネジメント

—重点目標「認め合い進んで学び合う学年・学級づくり」を目指して—



市内の学校では最も児童数の多い大規模校であったが、平成30年度の学校分離に伴い、児童数約380名の中規模校として新たなスタートを切った。この機を活かし「New春新」を合言葉に児童、職員、地域が力を合わせて、新しい学校づくりに取り組んでいる。「人間関係が良好な学級づくり」を重点に据え、さらに多様な異学年交流、縦割り班活動に取り組むことで、互い

に認め合う雰囲気をつくりだしてきている。また、「直東学園」の枠組みの中で、地域の協力や支援をいただきながら、学園内の各校との連携や小中一貫教育を進め、活力ある学校づくりを推進している。

### 上越市立春日新田小学校

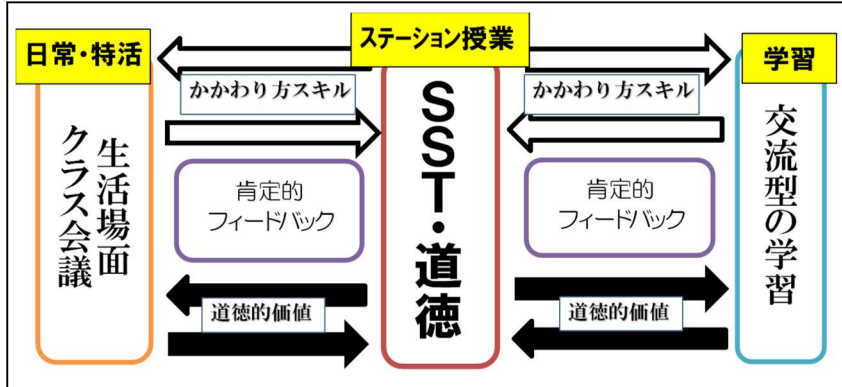
本校は長年、「知・徳・体」のうちの、**徳**「思いやりの心を持ち 協力し合う子」を教育目標の第1に掲げてきた。平成30年度の学校分離に伴い、児童数約380名の中規模校となり、教育環境が大幅に改善された経緯がある。現在は、大変落ち着いた中で、学習や授業が成立している。

児童の実態としては、友達に親切にできる子、仲良く活動しようとする子が多い。だが一方で、自己中心的な言動で相手を傷付けるなど、配慮を欠いた姿もしばしば見られ、対人的なスキルの獲得と向上を課題とする子も多い。生活指導上のトラブルも日々生じている。

このような実態から、相手を尊重し、望ましいコミュニケーションによって協同的に学ぶ集団づくりを進めることが、本校の最重要課題であることを、職員は共通認識している。よって、重点目標「認め合い進んで学び合う学年・学級づくり」を目指し、カリキュラム・マネジメント研究を推進することと

した。

## 2 研究の方策



〈図1 春日新田小学校ステーション授業構想〉

継続的に指導するための方策である。本校では、ステーション授業としてSST（ソーシャルスキルトレーニング）タイムと道徳科を位置付け、「学級生活において特に大切にしたいスキル」として、表1（かかわり方スキル）を設定した。

ステーション授業構想のコンセプトとして「①快・感動の体験②継続性③日常化」の3つが挙げられる。SSTタイムでは、ゲーム感覚で友達とコミュニケーションを図りながら、①の関わる楽しさ、「快・感動の体験」を共有する。また、この際に〈かかわり方スキル〉を活用することで、コミュニケーションの質を高める。さらに、教科学習や特別活動において、意図的に交流学習場面を設け、そこで〈かかわり方スキル〉を提示する。そして、子どもたちがスキルを活用して上手にコミュニケーションを図ったら、その姿を具体的に褒め、価値付けていくこととする。これを形式的ステーションと名付けた。（図1の白矢印）

また、道徳の単元配列を学校行事や子どもの実態に応じて組み換え、授業における道徳的価値への気付きと感動を学級生活に生かせるようにする。例えば、道徳科の授業での学びを教室掲示しておき、生活上の必要に応じて、これを観点としながら子どもが自分を振り返ったり、教師がよさをフィードバックしたりする。これを内容的ステーションと名付けた。（図1の黒矢印）

このようにして、核となるSSTタイムで扱った〈かかわり方スキル〉や授業における道徳的価値への気付きを、学級生活で継続的に活用し、日常化を図ることで、教室に良好な人間関係を醸成しようと考えた。（「②継続性③日常化」の具現）

### （1）ステーション授業構想による集団づくり

ステーション授業構想とは、核となる授業「ステーション授業」の中で「学級づくりにおいて特に大切にしたい、価値やスキルや態度を扱い、(略)生活や学習指導の中で日常化や一般化を図る」(赤坂 2011)もので、人間関係づくりを

### 〈かかわり方スキル〉

- ①班の全員が話す。
- ②友だちの話を最後まで聞く。
- ③あいづちをうちながら聞く。
- ④友だちの話をわかろうとする。
- ⑤時間いっぱい話す。
- ⑥相手をきずつけない言い方をする。

〈表1 春日新田小学校 かかわり方スキル〉



## (2) 目指す子どもの姿の具体化

重点目標が目指す「認め合い進んで学び合う子」を、新学習指導要領で整理された、育成を目指す資質、能力の3本柱で表2のように具体的に描いた。

<b>知識・技能（何を理解しているか。何ができるか。）</b>
〈かかわり方スキル〉のよさが分かり、これを身に付けて、話し合うことができる。
<b>思考力・判断力・表現力等（理解していること、できることをどう使うか。）</b>
多様な考えを認め、自分の考えを広げたり深めたりして、他者に伝えることができる。
<b>学びに向かう力、人間性等（どのように社会、世界と関わり、よりよい人生を送るか。）</b>
他者を尊重し、自ら積極的に課題解決に貢献しようとする。

〈表2 育成を目指す資質・能力の3本柱〉

これを校内授業研究の協議題とし、45分の授業の中でこれらの資質・能力が発揮されていたかを具体的な子どもの姿で語り合うこととした。その結果、資質・能力の育成を観点とした授業検証が可能となり、たとえ教科が異なっても、成果と課題を次の実践に生かせるようになった。

このようにして本校では、PDCAサイクルを回し、カリキュラム・マネジメントを推進した。

## 3 実践内容

### (1) カリキュラム・マネジメント研修

4、8月の研修で、各学年が視覚的カリキュラム表<sup>®</sup>を前に、以下のことを話し合った。

#### a) 生活科、総合的な学習の時間の指導計画

キャリア教育で育てたい汎用的能力のうち、重点目標に関わる力を、人間関係形成能力、社会形成能力と捉え、学習過程のどこでどのように協同する場面を設定し、これらを育てるのか考えた。

#### b) SSTタイムの計画（形式的ステーション）

〈かかわり方スキル〉を全学年で習得、活用するために、SSTタイムの計画を立て、カリキュラム表に位置付けた。また、各教科でスキルを活用する単元（場面）を考え、線で結んだ。

#### c) 道徳科の単元配列の見直し（内容的ステーション）

「B主として人との関わりに関すること（相互理解・寛容）」を重点目標の具現に関わる内容項目と捉え、いつ、どの教材で授業を行い、その後の学級生活にどう生かすかを考えた。



視覚的カリキュラム表<sup>®</sup>を活用した職員研修の様子

#### d) 学習指導改善調査結果分析に基づく重点単元の決定

結果分析から明らかとなった、身に付けさせたい知識、技能について、どの単元で、どのような手立てを講じて指導するかを考え、付箋をカリキュラム表に貼り付けた。

なお、研修で使用した視覚的カリキュラム表<sup>⑥</sup>は常時加筆修正できるように職員室に掲示し、計画の実行に役立てた。

#### (2) 実践的研修



赤坂研究室との実践的研修の様子



常に加筆される視覚的カリキュラム表<sup>⑥</sup>

上越教育大学教職大学院赤坂研究室支援プロジェクトチームの協力を得て、学級担任をサポートするための実践的な研修を重ねた。例えば、大学院生が行うSST指導の参観と講義や、職員のクラス会議体験などである。

さらに、〈かかわり方スキル〉の授業での活用法について、研究推進委員会から提案授業を行った。

#### (3) ソーシャルスキルトレーニングタイムの実践

SSTタイムは、9～11月の3か月間、週1回朝学習の時間に、各学年で取り組んだ。子どもたちの振り返りの記述を基に、考察する。

活動の中で、子どもたちが、スキルを活用するよさを実感しながら、人と関わる楽しさを体験していることが分かる。記述には友達への肯定的評価が多く、SSTが他者への関心を高め、人間関係を育てていることもうかがえる。学級内のコミュニケーションの量と質が、確実に上昇していった。

このSSTタイムで、わたしはあいづちをうつと話しやすくなったり、友達の話最後まで聞く大切さがあらためてわかりました。とてもよかったです。

今日は時間いっぱい話すことができよかったです。Fさんはたくさん話を続けていていいと思いました。Fさんはさらにあいづちをしてくれてとても話しやすかったし、話を続けたいくなりました。うれしかったです。

#### (4) 授業実践

##### ①形式的ステーションの実践例

4学年 算教科「面積」

###### 【本時のねらい】

多様な面積の求め方を交流することにより、自分の考えに合っている面積の求め方を選ぶことができる。

###### 【**かかわり方スキル**活用場面】

面積の求め方をグループで話し合う前に、①「全員が話す」を提示し、個人での追求を促した。どの面積の求め方が「**は**(早い)・**か**(簡単)・**せ**(正確)」か、話し合う活動では④「友だちの話を分かろうとする」をめあてとした。

###### 【**〇成果と☆課題**】

- みんなで話し合うと多様な方法が示され、いつでも使える方法が見つかるという学び合いのよさに気付くことができた。
  - 話し合いの視点を「**はかせ**の方法を考える」としたことは、児童が自分の考えと友達のを比較し、よさを見つけることに役立った。
  - 「～が難しかった」「～まで考えた」のように話型を提示したことは、①「全員が話す」手立てとして有効だった。
- ☆他教科でも、交流型の学習を実践しているため、その経験から、本時も意欲的に課題を解こうとする姿が見られた。ただ、ヒントカードなど算数的な手立てを失念していたため、児童の中には自分の考えをもてない子もいた。

##### ②内容的ステーションの実践例

5学年「銀のしょく台」(相互理解・寛容)

###### 【本時のねらい】

司教がなぜジャンを許せたのかを話し合うことを通して、人を許すことの難しさと尊さに気付く。

###### 【学級生活における道徳的価値の活用場面】

休み時間のいさかいや友人関係のトラブルの際に、自分の感情にとらわれて相手のことばかり責める姿が見られた。そこで、掲示物を用いて道徳の授業で共有した価値を想起させ、相手の立場で考えることの大切さを確認し、自分の言動を振り返らせた。



対話から自分を振り返り深く学ぶ子ども



道徳的価値にいつでも触れられるような掲示物

【O成果と☆課題】

- 対人関係において、自分の言動を顧み、素直に謝ったり、相手を許したりするなど、感情にとらわれず冷静に対応しようとする姿が見られるようになった。
- 強い口調や一方的な発言があった時に「相手意識が足りないよ。」と子ども自身が声を掛け合っていた。また、その言葉を素直に聞き入れ、相手の立場に立ち、言葉を選んで伝える姿が見られるようになった。
- ☆必要に応じて繰り返し価値を振り返り、生活に生かしていくことが重要である。

#### 4 成果と課題

##### (1) 全国学力・学習状況調査の結果から

まずは、上記調査の結果から考察した。今年度は、表3のように国語、算数ともに全国、県平均を上回り、近年にない良好な結果となった。

※平均正答率			
	春日新田	新潟県	全国
国語	69%	68%	63.8%
算数	68%	66%	66.6%

〈表3 令和元年度全国学力・学習状況調査結果〉

実は本校では、昨年度4, 5学年で先行的に形式的ステーションの実践を行っていた。つまり今年の6年生は、5年生時に、各教科の交流型学習において〈かかわり方スキル〉を継続活用した学年である。これにより、安心して自分の考えを表現できる場を保障したことが、学力向上につながったのではないだろうか。教室内に望ましい人間関係を醸成することは、「主体的、対話的で深い学び」を実現するための必要条件であり、結果として学力向上につながるものとする。6年生の教室内に対話的な環境が整っていたことは、次の表4の質問紙調査の結果からもうかがえる。

番号	質問事項	春日新田小学校	県	全国
29	学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか	92.2% (57.8)	80.4% (36.1)	74.1% (30.3)
32	あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていると思いますか	96.9% (67.2)	83.6% (43.3)	74% (30.1)
33	学級活動における学級での話し合いを生かして、今、自分が努力すべきことを決めて取り組んでいると思いますか	87.5% (53.1)	82.5% (38.1)	73.4% (28.8)
34	道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいると思いますか	96.9% (65.6)	88% (51.6)	80.9% (42.1)

※上段の数値…「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」を合わせた割合  
下段( )の数値…「当てはまる」のみの割合

〈表4 平成31年度全国学力・学習状況調査児童質問紙回答〉

ここに、学級経営を核としてカリキュラム・マネジメントを推進する意義が確かめられた。

## (2) QUアンケートの結果から

表5、各学年の学級生活満足群の割合である。

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	平均
6月	32%	49%	75%	88%	67%	86%	66%
11月	51%	66%	78%	86%	73%	82%	73%

※11月全国平均値：1～3年42%、4～6年43%

〈表5 各学年の学級生活満足群の割合〉

数値が上昇した学年が多く、また、上がっていかなくとも全国平均値を大きく上回る結果となった。これは、(かかわり方スキル)の習得と活用が望ましい集団づくりに有効だったことを示している。

## (3) 課題 一次年度に向けて

今年度は、担任によって取組の頻度に差があった。また、職員の異動によりこれまでの実践を確実に引き継ぐ必要がある。新しいメンバーで、さらなる協働性を発揮し、取り組んでいくことが次年度の課題と言える。

学校全体で学級経営を核としたカリキュラム・マネジメントに取り組んだことにより、全校児童は、(かかわり方スキル)の活用の効果を体験的に知っている。この状況をいかに生かして、落ち着いたのある教室、学校を維持していくか。来年度は、研究の真価が問われる年となるだろう。

## 5 ワーキンググループDによる春日新田小学校の開設

上越市立南川小学校 松岡 貴徳

### 「方法知」と「内容知」でつなぐカリ・マネの新しいかたち

春日新田小学校では、重点目標「認め合い進んで学び合う学年・学級づくり」の実現を目指し、ランドデザインの「学習指導」と「豊かな心」の中心に『学級づくりをベースとした授業の工夫』を位置づけ、「方法知」からのアプローチを試みている。しかし、「方法知」からのアプローチだけでは、子どもが認め合い進んで学び合う姿の具現にはつながらない。「主体的で対話的な深い学び」を成立させるためのカリキュラムを創るためには、「方法知」からのアプローチと「内容知」からのアプローチが不可欠である。

## 1 「方法知」でつなぐカリキュラム・マネジメント

### (1) 学級づくりの中心となる〈かかわり方スキル〉

学級生活において特に大切にしたいスキルとしての〈かかわり方スキル〉は、教科・領域を超えて共通する学習や生活の基盤として機能するものである。学習内容や活動に応じて重視するポイントが変わったり、発達段階に応じてスキルが選択されたり軽重付けられたり、柔軟でフレキシブルなツールとして活用されている。

### (2) 資質・能力の一つとしての〈かかわり方スキル〉

この〈かかわり方スキル〉を知識・技能の一つとして位置付け身に付けることにより、言語能力や情報活用能力、問題発見・解決能力を発揮するための基盤となり、「話し方」や「聞き方」がコミュニケーション力そのものにも成り得ていく。

### (3) 「認め合い、進んで学び合う」ためのアプローチ

すべての子どもたちが関係性のよい集団で学ぶこと、そこに「幸せ」がある。また、「学びに向かう姿勢」が問われている今、望ましい関わり方のための効果的な指導を一貫して、継続していくことが求められている。春日新田小学校の研究は、まさにその時代の要求に正対した取組であり、重点目標の文言にある「～合う」に含まれる意味の具現のために必要な資質・能力が育まれるためのカリキュラムを創造し、実践している研究である。

## 2 「内容知」をつなぐカリキュラム・マネジメント

### (1) 「重点目標」の具現を見据えた資質・能力の焦点化

当校では、重点目標の具現に向けて、人間関係形成能力、社会形成能力が特に関わりのある資質・能力と捉え、生活科・総合的な学習の時間の指導計画をその資質・能力の育成の視点から見直す作業を行っている。また、道徳科の内容「主として人との関わりに関すること（相互理解・寛容）」を重点目標の具現に関わる項目として捉え、学校行事や特別活動との関連を図りながら単元配列の見直しを行っている。重点目標を達成するために、焦点化された育みたい資質・能力の育成に関わる「内容知」を見直すことは、カリキュラム・マネジメントをさらに加速させる。

### (2) 子どもの学びの履歴をもとに創るカリキュラム

授業研究において大切にされていたのが、「フィードバック」と「見取り」である。問題の解決に向けて協働的に学ぶ姿を実現するためには、子どもが本気になる課題や解決せざるを得ない課題の設定が欠かせない。課題解決の過程で「このことだけは話したい!」「友達の考えが気になるから聞かなきゃ!」「折り合いをつけなきゃ」・・・そんな思いや願いをフィードバックし、一人一人の学びを丁寧に見とることを大切にしている教職員の姿勢こそが、春日新田小学校のカリキュラムを支えている。

○実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
10月	カリキュラム・マネジメント研修、SST研修、
11月	クラス会議研修、校内授業研究（講師：上越教育大学教職大学院 赤坂教授）
12月	
1月	研修のまとめ執筆
2月	
3月	カリキュラム・マネジメント研修



## 2 実践校【上越市立城北中小学校】

### ○研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

### ○調査研究の内容及び調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

城北中学校は、創立 62 年目を迎え、地域から寄せられる学校教育への期待は高く、地域が学校を支え、地域で子どもを育てようとする温かな学校風土をもつ。生徒は愛校心が強く、温かな学校風土を醸成している。生徒会基本理念“限りなき前身こそ我らの姿”の下、よき伝統を継承するだけに留まらず、積極的に改善しようとする姿勢が見られる。

当校は、2018 年ユネスコスクール加盟校として認定され、ESD（持続可能な開発のための教育）の概念に基づき、以下を大きな柱として位置付け、様々な教育活動に取り組んでいる。

- ユネスコスクール加盟校として
- キャリア教育推進校として
- 人権教育、同和教育推進校として



## 上越市立城北中学校

### 1 カリキュラム・マネジメントの方向性

令和元年度「これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究」の実践校として、「学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究」をテーマに令和 2 年度までの 2 年間に渡って取組を推し進めることになった。そこで、2021 年に迫る中学校での新学習指導要領全面実施も踏まえ、本年度は主に三つの内容からカリキュラム・マネジメントに取り組んだ。

#### （1）SDGs の視点を教育活動の中核に据える

新学習指導要領の前文及び総則において、「持続可能な社会の創り手の育成」が掲げられている。これは、ユネスコスクールが目指す「持続可能な社会の担い手の育成」と同意であり、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るといふ社会に開かれた教育課程の実現を図ることにもつながっていく。

当校では、こうした背景を受け、2015 年に国連で採択された SDGs をあらゆる教育活動の中核に据えることにした。新しいことを企画するだけでなく、これまでの学校の文化や風土に根差した学校行事や活動について新たな価値を見出すことに軸足を置いた。

#### （2）総合的な学習の時間のコンテンツの見直し

各教科での学びを統合するものとして位置付け、そのコンテンツの見直しに着手した。新学習指導

要領で示される三本柱を基に描くグランドデザインから総合的な学習の時間で育みたい資質・能力＝学習の基盤となる資質・能力を設定し、城北中学校の実態から特に重点を置くべきものを検討した。その上で3年間の学びをパッケージとして捉え、既存のコンテンツを見直したり、新たに開発したりした。新たに総合的な学習の時間の視覚的カリキュラム表<sup>⑥</sup>の作成に取り掛かり、各教科等の学びがどのように発揮されるのかを明確にした。

### (3) 各教科の年間指導計画の検討

新学習指導要領全面実施に向け、各教科の年間指導計画の見直し準備に取り掛かった。(2)で設定した資質・能力を念頭に各単元の組立について再考し、城北UDL(ユニバーサル・デザイン・ラーニング)の視点を入れながら各場面における手立てなどを検討することにした。

## 2 職員研修の実際

### (1) ESD、SDGsについて学ぶ

まず、4月に釜田聡教授(上越教育大学)から、当校のカリキュラム創造委員会のメンバーに基本的な考え方や教育活動との関わり、先進地域・学校の取組などについてご教授いただいた。また、校外での研修会に参加するなどして知見を深め、その上で職員研修会“一步の会”を定期的開催した。「ESD、SDGsとはどんな考え方なのか」「学校の教育活動においてどのように取り扱うのか」など、基本的な部分から研修を始め、全職員で共通理解を図った。その中で、前校長の小林晃彦特任教授(上越教育大学)をお招きし、ESD、SDGsの視点から城北中学校の教育活動をどのように展開させていくべきか、世界の情勢や国内の動向などを踏まえながら、具体的にご教授いただいた。



小林晃彦特任教授をお招きして研修を深める



コンテンツ見直し作業を進める

### (2) SDGsの視点からコンテンツを考察

次に総合的な学習の時間におけるコンテンツの見直し作業に取り掛かった。既存のコンテンツについて配列や学びの系統性など吟味しながら、育みたい資質・能力がそれぞれのコンテンツの学びの中で本当に高めることができるのか、あるいはどのように高められるのかなどをKPTの手法を用い、職員間で活発な意見交換を行った。また、SDGsの視点からそれぞれのコンテンツのもつ価値について検討し、必要に応じて活動内容について新たなアイデアを出し合った。

### (3) 3年間の学びをパッケージとして再編成

(2)でまとめた内容を基に、3年間の学びをパッケージとして捉え、見直したそれぞれのコンテンツを再配列した。さらに具体的な時数を考えながら、コンテンツの中に探究のサイクルをどう落とし込むかを検討した。城北中学校の生徒の実態を踏まえ、コミュニケーション力や情報発信力が高められる活動となるよう、探究のサイクルにやや重み付けをしながら、これまで話し合われてきたイメージを具体的なかたちに整えていった。

総合的な学習の時間

ナカノマ探 1 学年

「冒険・中ノ俣」「上越 2050」



◆第1学年での学習事項とSDGsとの関連



中ノ俣の営みに着目して、住み続けられるまちづくりを課題にする。



雇用創出や文化振興、持続可能な観光などをテーマに探究する。

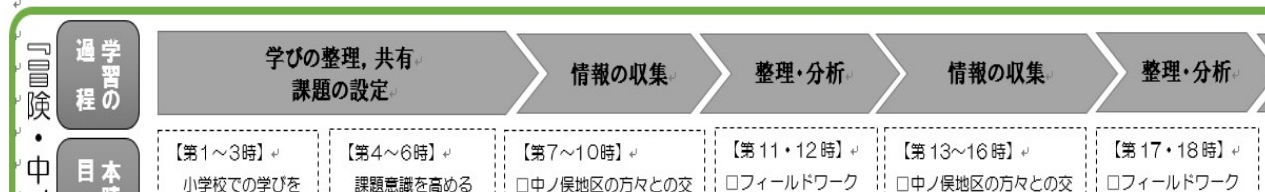


市の政策を知ることを通して、持続可能な消費と生産について探究する。

◆3年間で育成を目指す資質・能力

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等
□地域内外の人、もの、ことに関わる探究活動において、各教科等の学びを生かし、地域内外の自然や社会が持続する上での課題や自己の生き方に関わる課題の解決に必要な知識及び技能を身に付ける。	□地域内外の人、もの、こととの関わりを通じて、それらの事象や自己の生き方に関わる問いを見出し、課題解決に向けて探し、考えたことをまとめて、表現する力身に付ける。

◆豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会へ参画する人材として必要な資質・能力を育成する単元の授業設計



(4) 視覚的カリキュラム表(総合版)の作成

1、2学期の職員研修を経て、カリキュラム創造委員会で総合的な学習の時間の視覚的カリキュラム表の作成に取り掛かった。それぞれのコンテンツにおける活動の流れ、時数配分、育みたい資質・能力、SDGsとの関連などが一目で確認できるよう、先進地域の取組を参考にしながらレイアウトや内容を検討した。



アイデアを基にコンテンツの流れをイメージ化する

3 教育活動と生徒の様子

(1) 校内環境の整備



生徒玄関に設置されるモニターの画面例

デジタルサイネージでの情報発信

デジタルサイネージを活用し、日程や連絡事項などの他に様々なCMを放送している。例えば、京都市が制作したSDGsに係るCMである。京都市は、日本全国 815 の市・区を対象として行われているSDGsの先進度調査で2018年に1位であった。古い街並みを有する古都が、持続可能な街づくりを行政として進めている点について、修学旅行で訪問する2年生を対象に発信した。

## (2) 廻り階段、校内掲示の工夫

職員はもちろんであるが、生徒の意識啓発を目的として、校舎の中心を貫く廻り階段一段ずつにSDGsの17のゴールを掲示している。



廻り階段や校舎内の掲示例

## (3) 専門委員会の再編と活動の見直し

2月に行われた第2回生徒総会では、執行部より専門委員会の再編案が提案された。これは、将来の生徒数減少を見越した専門委員会の統廃合を行いながら、その過程の中でSDGs視点から生徒会活動の見直しを図るというものである。

各専門委員会や各学級での話し合いはもちろん、リーダーが集まり校長や職員と議論を重ねるなど、長い時間を掛けてじっくりと準備を進めた。その結果、5つの専門委員会を統合して3つの組織に再編し、新たにユネスコ委員会を新設することになった。それぞれの専門委員会が担う活動も大幅に見直しを図り、全体でESD、SDGsを意識した共通の方向へ進もうという雰囲気が醸成された。



新設のユネスコ委員会に期待する活動や望む生徒像について説明する執行部

## (4) 総合的な学習の時間

3年間の学びを見直す中で、新たにテーマとして『持続可能なまちづくり』を設定し、方向性を明らかにした。

### ① 2年生：修学旅行の学習プログラムの検討

2年生の修学旅行に向けた事前学習では、新たにESDの考え方やSDGsカードゲームを通して学ぶという活動を新たに取り入れた。事前に職員研修を行い、外部講師や職員によるコーディネートの下、生徒は楽しみながら理解を深め、その後の活動へのイメージを膨らませた。



講師を招いて研修を受ける職員

生徒による実行委員会の話し合いでは、「ホテルのアメニティーは使わずに自分たちで持っていく」「お土産を購入する際は必ずマイバッグを使用する」など、例年には見られない項目が議論の対象となっていた。

また、テーマについて各班で探究を進める班別研修では、例年の訪問先から大きな変化が見られた。

### 【訪問先の例】京都市役所

- ・ 産業観光局 商工部 伝統産業課
- ・ 環境政策部 循環型社会推進部 ごみ減量推進課
- ・ 保健福祉局 健康長寿のまち京都推進室
- ・ 文化市民局地域自治推進室
- ・ 産業観光局観光 MICE 推進室

『持続可能なまちづくり』を大テーマに掲げ、事前学習の中でE S Dの観点から京都市を調べてみると国内の最先端を走る地域であることを生徒は知った。その結果、情報収集する訪問先に、多くの班が京都市役所を中心とした行政機関や大学、民間団体など選択することになった。その他、SDG sの理念に基づき取組を進める企業を選択するケースもあり、“行政”と“経済”をキーワードにテーマに迫ることになった。

### ②1年生：ナカノマ探も方向性を修正

城北中の総合的な学習の時間を代表するコンテンツである中ノ俣地域を訪問しての探究学習、通称「ナカノマ探」も内容を精査し、方向性を新たに定めた。これまで重視してきたキャリア教育の側面を残しつつ、『持続可能なまちづくり』というテーマの中で、中ノ俣地域を限界集落ではなく、他の地域よりも30年先を生きる地域と捉えるようにした。物質的な豊かさを追求してきた社会の在り様からの転換が迫る中、中ノ俣地域から浮かんだキーワードは、“地域”つまりコミュニティーの存在であり、共生という考え方に1年間の活動を通してたどり着いた。



中ノ俣地域の方から情報収集する生徒

### ③ 3年生：地域活性化を捉え直す

地域活性化活動を3年間の学びのゴールとして位置付ける3年生では、SDGsの視点から地域を見つめ直した。市民の意識を高めるために私たちに今できることを考えたグループは、給食を題材に食品ロスについてのCMを作成し、前述したデジタルサイネージを使って情報発信を行った。



1. 2年生での学びからつながる3年生については緩やかなシフトとなったが、それでも2030年を踏まえたレポート作成が行われ、各々が捉える『持続可能なまちづくり』が盛り込まれていた

## 4 成果と課題

### (1) ESD、SDGsについて共通理解が深まる

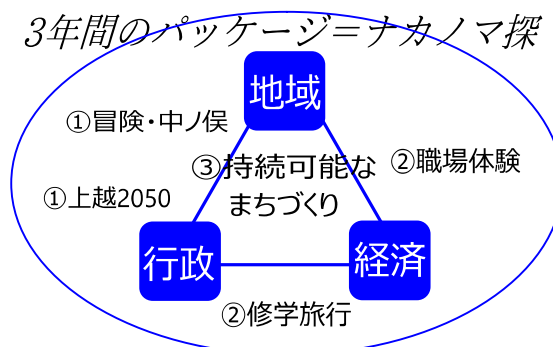
様々な職員研修、また主に総合的な学習の時間での活動を通して、職員の理解は確実に深まった。新学習指導要領の中核に位置付けられるこの理念、考え方を学び、教育活動に取り入れたことは極めて重要であった。

### (2) 総合的な学習の時間のパッケージ化

3年間を貫くテーマを新たに設定し、コンテンツを精査したことで学びの連続性や系統性の確保について見通しが立った。次年度は、『持続可能なまちづくり』というテーマに対して、“行政・経済・地域”という3つの側面からアプローチし、3年生では個人探究を進めて、地域活性化プログラムの立案・発信を行う予定である

### (3) 視覚的カリキュラム表<sup>※</sup>の検討と作成

本年度は、グランドデザインの見直しを図り、その上で育みたい資質・能力を考えてみた。また、総合的な学習の時間について視覚的カリキュラム表<sup>※</sup>の作成を進め、ある程度のかたちにすることができた。次年度は、各教科等についても同様の作業を進め、設定する資質・能力を教科横断的に育ていくためのプロセスを視覚的に把握できるようにしたい。そして、様々な実践を重ね、学習の基盤となる資質・能力の妥当性やどのように育成していくかプロセスの有効性などを生徒の姿や生徒による自己評価、教職員の見取りから考察していきたい。



## 5 ワーキンググループDによる城北中学校の解説

上越市立春日中学校 小松 祐貴

### 当事者意識を高め、みんなでカリキュラムをマネジメントするために

城北中学校の育成すべき資質・能力から具体的な目標設定、それを日々の授業デザインへと落とし込むまでの手立てには学ぶところが多い。特に中核に据えている総合的な学習の時間には、自分たちで創るという意気込みが溢れている。「ナカノマ探」や「R i k k a」など、他に誇れる魅力的なコンテンツは、全職員で更新作業を行いながら更なる魅力を追究し続けている。

城北中学校のカリキュラム・マネジメントには様々な仕掛けがある。また、その仕掛けによってもたらされる効果は多岐にわたる。

#### 1 「ユネスコスクール」を旗印に掲げる

旗印を掲げることで、みんなが誇りをもてる取組になっている。また、SDGsの視点で全ての教育活動を見直すことで、目標と手だてが明確になっている。

#### 2 創って終わりではなく、更新していく

視覚的カリキュラム表を用いて子どもの姿や実践を見える化し、カリキュラム・マネジメントを組織的・協働的に行うことができている。また、育みたい資質・能力から、総合的な学習の時間の中核である「ナカノマ探」「R i k k a」などのコンテンツを再検討し、毎年更新する。

#### 3 研究推進を担う「カリキュラム創造委員会」と職員研修「一步の会」

「カリキュラム創造委員会」、「一步の会」を合言葉にすることで、共同体感覚が醸成されている。研究推進部「カリキュラム創造委員会」では、上越教育大学など関係機関と関わることで、指導・助言などを必要なタイミングで全職員に流すことができている。

職員研修「一步の会」は、1回1時間程度のコマメな研修とすることで負担感が軽減され、持続可能な取組となっている。また、ワークショップ型で付箋紙を用いながら全員の声が反映されるようにしている。

これら取組の継続により教職員の協働性の醸成につながり、また研修を行うごとに教職員の当事者意識の高まりがみられる。また、教職員一人一人の生徒に育みたい資質・能力の意識化が日々の授業デザインへとつながり、具現化につながっている。城北中学校の子どもも大人もわくわくする主体的な活動を創り上げている。

○実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容	
10月	大学での指導・研修会①※カリキュラム創造委	ESD、SDGs についての校内研修※講師を招聘
11月	育みたい資質・能力の検討①	「総合」コンテンツの見直し 先進地域視察
12月	育みたい資質・能力の検討②	「総合」年間指導計画検討
1月	育みたい資質・能力の検討③	「総合」視覚的カリキュラム表検討
2月		「教科」年間指導計画
3月	大学での指導・研修会②※カリキュラム創造委	「教科」視覚的カリキュラム表検討



### 3 実践校【上越市立高士小学校】

#### ○研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

#### ○調査研究の内容及び調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

### 善兵衛学習を中核とした確かな学力・豊かな心・健やかな体の育成 ～複式カリキュラムの創造～



高士小学校は、明治7年に創立し、今年度で創立146年目の学校である。校区には岩の原葡萄園があり、その創設者は川上善兵衛翁である。川上善兵衛翁が高士村長であった明治36年に現在の位置に高士小学校の校舎を落成した。郷土の偉人川上善兵衛翁の業績や生き方に学ぶ当校の「善兵衛学習」は平成19年から始まり、今年度で13年目となる。

## 上越市立高士小学校

### 1 学校課題と使命

#### (1) 状況

高士小学校校区は、旧高士村区とほぼ一致しており、古くから地域のまとまりが強い地域である。校区の上越市北方には「日本のワイン葡萄の父」として知られる川上善兵衛が創設した岩の原葡萄園がある。川上善兵衛翁の業績や生き方から感得できる次の3つの姿(①地域の人たちを考える姿、②新しいことに挑戦する姿、③最後まであきらめない姿)は、これからの時代を生きる子どもたちに身に付けさせたい教育的価値の高い地域素材である。そして、この善兵衛翁の3つの姿と児童の実態から当校の重点目標「笑顔・挑戦・自分から」を策定し、全教育活動を通じて推進している。

一方、当地域は少子高齢化が年々進んでおり、高士小学校が抱える大きな課題として、次の3つが挙げられる。

- ・複式学級における善兵衛学習の改善

- ・少子化が進む中での地域の期待
- ・職員の減少と負担感、担当者の苦勞

## (2) めざす方向 (使命)

前出の課題の解決を目指し、学校として果たすべき使命は次の3つである。

- ・地域の文化の継承
- ・継いでいく地域人材の育成
- ・地域における学校の中核的役割

これらの使命と向き合いながら、これまでも毎年、教育課程の改善と工夫(カリキュラム・マネジメント)を積み重ねてきた。

## (3) 教育課程における課題

来年度を視野に入れた教育課程の課題は、主に次の3つである。

- ①令和2年度からの複式学級(3, 4年、5, 6年)のカリキュラム編成・教育活動の見直し、精選(学級数1減、職員数1減)
- ②地域人材の高齢化等による新たな地域人材の確保
- ③研修時間の確保

特に、令和2年度から3, 4年生に加えて、5, 6年生が複式学級になることが今までにない大きな課題である。また、善兵衛学習の外部講師として依頼していた地域人材が高齢化のため辞退することも起きている。さらに、教職員が次年度カリキュラム・マネジメントのための研修時間を確保することも課題であった。

これらの課題に対し、以下のように今年度から取り組んできた。

## 2 課題解決の基本的な構え

学校運営協議会(コミュニティ・スクール)を活用し、保護者・地域との対話や協働を基盤に、課題解決することを基本的な構えとして取り組んだ。

## 3 令和元年度取組の柱

次年度カリキュラム・マネジメントを行うための基本的な取組の柱は次の4つである。

### ①令和2年度学級編成(5, 6年複式)に向けたカリキュラム作りと実践

令和元年度の実践(1, 2年合同, 3, 4年複式)を進めながら、令和2年度のカリキュラム作りを行う。

※A B年度、視覚的カリキュラム表の教科横断的な視点

### ②地域人材の整備と活用

学校運営協議会・PTA・育成会と対話・協議しながら善兵衛学習等の教育活動を支援する人材の整備、支援の体制づくりを行う。

### ③善兵衛学習についての職員研修計画の作成

### ④令和元年度善兵衛学習の評価

日常の善兵衛学習に加え、まつかぜラリー(ゆかりの地を巡る縦割り班遠足)・職場体験学習・修学旅行・文化祭・公民館発表・リーフレット作成等で児童の変容の姿から評価する。

そのために以下のことを行った。

#### \* 研修時間の確保

それまで月1回であった職員研修を、月2回程度に増やすなど、研修時間の確保に努めた。

#### \* 上越カリキュラム委員会の支援

上越カリキュラム研究推進委員会から職員研修などに何度も参加して頂き、指導・助言を受けた。

#### \* 上教大大学校支援プロジェクトの支援

上越教育大学山田智之研究室からキャリア教育の視点でカリキュラム・マネジメントを支援していただいた。

2019.12.5 文責：吉村憲治・宮島康則（上教大院）

## 上教大「学校支援だより」

～ 普段の活動をキャリア教育の視点で見返すと～

あっという間に12月、2学期も終盤を迎えるとともに、令和元年も残すところ1か月となりました。いつも様々な活動を子供たちとともにさせていただきありがとうございます。今回は先週同行させていただいた校外学習を中心に、支援の中での気づきからいくつか紹介させていただきます。

**<2019年11月25日(月)、28日(木)の支援にて>**  
 ○授業内容：校外学習 第3、4学年「パロー」、振り返り 第6学年「前島記念館、坂口記念館」等

各視点	知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
郷土愛	地域の生活の場、偉人を訪ねる 地域の特徴やゆかりの人について調べに実際に行くことで、新たな発見が。		
かかわる力 (人間関係形成・社会形成能力)	<b>ファシリテーター</b> 教師が仲介となりながら子供と学びを上手につなげていく。	<b>かかわり合い</b> 写真を見に前へ。ちらっと机を覗き、他者の考えに触れる機会に	
みつめる力 (自己理解・自己管理能力)		<b>学びの場の整備・提供</b> <b>総合的な見方</b>	<b>熱い気持ち</b> 説明してくださる方の思いや熱意に触れ、何かを感じることも。
やり抜く力 (課題対応能力)	<b>活動内容の可視化</b> 授業の流れや方法を掲示して、自律的に活動できるような工夫。	<b>いろいろな視点</b> ちょっと視点を変えれば、様々な教科とのつながりも見つかる。	<b>学びの創造</b>
夢おこす力 (キャリアプランニング能力)		<b>新たな視点</b> 教科書には載っていない様々な発見や話を聞く機会に。	<b>主体的学び</b> 自分の課題を持って学習に取り組むことで、より深い学びに。

**学びの姿がきらり～活動の様子から～**

音やにおい、温度、感触など、実際に行ってみないとわからないことも。体験を通して、確かな学びに。

チームの力を存分に発揮して、自分も相手も互いに学びが自分のものに。

寒さもあり、甘酒と記念館の方の思いの温かさが、とても身に沁みました。



職員研修の様子

〈定期的発行された上越教育大学学校支援だより〉

## 4 主な取組

### (1) 資質・能力、目指す姿の整理

まずは、来年度の重点目標を今年度と同じく「笑顔・挑戦・自分から」とすることを教職員で共通理解した。その上で、当校の育成する「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」と新学習指要領の資質・能力の3本柱で子どもに育む資質・能力の整理・分析を行い、表1のように資質・能力と目指す姿をまとめ、それを「高士小スタイル」と呼ぶことにした。それぞれのテーマごとに3つのワーキンググループにおける検討会と全体での協議を繰り返し行いながら、教職員全員が①資質・能力と②目指す姿の理解を深めていった。

カリキュラムマネジメント 高士小学校スタイル				
重点目標				
笑顔 挑戦 自分から				
		確かな学力	豊かな心	健やかな体
知識・技能		課題解決のための基盤となる知識・技能	友達との関わり方に関する知識・技能	心と体の健康づくりや安全に関する知識・技能
	めざす姿	学校で学習したことが分かる	自分も友達も大切な存在であることが分かり、互いに認め合うことができる	体を動かすことは心と体の健康づくりのために大切であることが分かり、進んで運動することができる
思考力・判断力・表現力等		自分の考えをもち、進んで話す力	あたたかい人間関係をつくるためのコミュニケーション能力	運動や生活習慣を振り返り、課題解決に向けて考えたことを伝え合う力
	めざす姿	相手の話をよく聞いたり、相手に伝えるように話したりする。	相手の気持ちを考えて話したり行動したりする	自分の生活を見通して、がんばりたいことを決め、伝えている
学びに向かう力・人間性等		協働的・対話的に学び、主体的に活動する態度	友達とともに、よりよい自分になろうとする態度	友達とともに、運動や健康づくりに励み、楽しく明るい生活を送ろうとする態度
	めざす姿	自信をもって積極的に考えを伝え合い、自分の考えを深めようとする	互いのよさを認め合いながら、よいと思ったことを進んで行おうとする	友達に声をかけて運動をしたり、家族と健康について考えたりして生活しようとする

〈表1 高士小スタイル〉

## (2) 複式の指導計画作成

来年度の複式授業をどのように編成するかを検討した。教科の系統性・順序性・関連性を考えて2年間を見通したAB年度を同時に作成した。その計画表が表2である。

	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図工	家庭	体育	外国語	道徳	外国語活動	総合	学活
1年(11)	単式	-	単式	-	複式	複式	単式	-	複式	-	単式	-	-	単式
2年(5)	単式	-	単式	-	AB	AB	単式	-	AB	-	単式	-	-	単式
3年(8)	単式	複式	複式	複式		複式	複式	-	複式	-	複式	複式	複式	複式
4年(8)	単式	AB	学年別	AB		AB	AB	-	AB	-	AB	AB	AB	AB
5年(7)	単式	複式	単式	複式B		複式	複式	複式	複式	複式	複式	-	複式	複式
6年(12)	単式	AB	単式	単式		AB	AB	AB	AB	AB	AB	-	AB	AB
なかよし(2)														
<週あたり時数>														
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図工	家庭	体育	外国語	道徳	外活動	総合	学活
1年	9	-	4	-	3	2	2	-	3	-	1	-	-	1
2年	9	-	5	-	3	2	2	-	3	-	1	-	-	1
3年	7	2	5	2.5	-	1.7	1.7	-	3	-	1	1	2	1
4年	7	2.6	5	3	-	1.7	1.7	-	3	-	1	1	2	1
5年	5	2.8	5	3	-	1.4	1.4	1.7	2.6	2	1	-	2	1
6年	5	3	5	3	-	1.4	1.4	1.6	2.6	2	1	-	2	1
なかよし														

〈表2 令和2年度高士小学校複式授業計画〉

## (3) 稲作体験活動の見直し

来年度から、5・6年生が複式学級になることから、今年度まで5年生の善兵衛学習の中核として取り組んできた稲作体験活動についての見直しを次のように行った。

### ①職員の協議

1学期末に、これまで5年と6年を担当した教職員が複数回協議した。

### ②学校運営協議会での協議

学校運営協議会で複数回協議を行った。その結果、5、6年複式学級と一緒に職場体験活動を行うことのメリットや稲作体験活動は教育的価値から残したいという方向にまとまり、次年度は全校稲作体験活動に移行することになった。

### ③保護者・地域への周知

10月中旬に、次年度教育課程を説明する場を設定し、全校稲作体験活動に移行することを説明した。支援への協力を含め、了承を得た。また、学校だよりと地域広報紙「高士だより」で全戸に周知した。

## (4) 理科の複式指導計画の作成

5、6年の複式学級に伴って、理科の指導計画作成において配慮すべき点を洗い出した。5、6年

理科の学習内容のうち、①エネルギー（5年電流と6年電気）②粒子（5年溶け方と6年水溶液）③生命（5年植物発芽と6年植物はたらき）④生命（5年魚誕生・人誕生と6年動物はたらき）⑤地球（5年流れる水と6年大地）において、系統性・順序性・関連性に留意すべきことが分かった。また、実際に複式で行うためには、これまでの単学級の履修状況から前年度5年生がB年度を行うことが最善であろうことも分かった。

### （5）善兵衛学習全体計画の作成

「高士小スタイルの資質・能力」から善兵衛学習全体計画を作成した。次の表3、表4はR2年度とR3年度の善兵衛学習全体計画の一部である。

善兵衛学習全体計画の作成では、発達段階を考慮しながら高士小学校スタイルで育みたい資質・能力を設定していった。その結果2年間にトータルで考え、A・B年度それぞれでのまとまりで考えなければならないことに気づき、高学年・中学年・低学年それぞれの善兵衛学習指導計画（2年度分）を作成し、善兵衛学習講師や支援者と協議した。

善兵衛学習の内容 (R.2年度)			
学年	目標を実現するにふさわしい 探究課題	探究課題の解決を通して育成を目指す 具体的な資質・能力	
6年 ・ 5年	岩の原葡萄園の創設やワイン造りに生涯をかけた「川上善兵衛」の思いや願いと、自分の生き方(志)の探求	知識及び技能	「川上善兵衛」が、岩の原葡萄園の創設にかけた願いやワイン造りへの思いが分かる。
		思考力、判断力、表現力	「川上善兵衛」の時代の人の生き方を見つめ、人としての生き方を考える。
		学びに向かう力、人間性	進んで社会や生活の課題解決に取り組もうとする。
4年 ・ 3年	「高士のために」と考えた「川上善兵衛」の葡萄栽培や地域貢献	知識及び技能	葡萄栽培や地域の発展は、「川上善兵衛」の努力や工夫によって今日まで続いていることが分かる。
		思考力、判断力、表現力	相手や目的に応じて、分かりやすくまとめ、表現する。
		学びに向かう力、人間性	異なる意見や他者の考えを受け入れて、取り組もうとする。
生活科との関連			
2年 ・ 1年	学校や地域に残る「川上善兵衛」との出会い	知識及び技能の基礎	身の回りの対象に働きかける過程において、「川上善兵衛」の存在に気付く。
		思考力、判断力、表現力の基礎	思いや願いを実現する過程において、比べたり、分類したりして、分かったことを表現する。
		学びに向かう力、人間性	意欲や自信をもって学んだり、生活を豊かにしたりしようとする。

〈表3 令和2年度善兵衛学習指導計画〉

善兵衛学習の内容 (R.3年度)			
学年	目標を実現するにふさわしい 探究課題	探究課題の解決を通して育成を目指す 具体的な資質・能力	
6年 ・ 5年	岩の原葡萄園等で働く人の思い や願いと自己の将来	知識及び技能	岩の原葡萄園等で働く人々の思いや願いが分かる。
		思考力、判断力、表現力	実社会で働く人々の生き方を見つめ、自己の将来を考える。
		学びに向かう力、人間性	進んで社会や生活の課題解決に取り組もうとする。
4年 ・ 3年	「川上善兵衛」の業績とその思い を受け継ぐ岩の原葡萄園	知識及び技能	岩の原葡萄園は、「川上善兵衛」の努力や工夫を受け継ぐ人がいることによって今日まで続いていることが分かる。
		思考力、判断力、表現力	相手や目的に応じて、分かりやすくまとめ、表現する。
		学びに向かう力、人間性	異なる意見や他者の考えを受け入れて、取り組もうとする。
生活科との関連			
2年 ・ 1年	学校や地域に残る「川上善兵衛」 との出会い	知識及び技能の基礎	身の回りの対象に働きかける過程において、「川上善兵衛」の存在に気付く。
		思考力、判断力、表現力の基礎	思いや願いを実現する過程において、比べたり、分類したりして、分かったことを表現する。
		学びに向かう力、人間性	意欲や自信をもって学んだり、生活を豊かにしたりしようとする。

〈表4 令和3年度善兵衛学習指導計画〉

#### (6) 今後の予定

令和元年度末までに、①各教科の評価計画と②視覚的カリキュラム表<sup>※</sup>を作成する。

## 6 成果と課題

教職員全員で「高士小学校スタイルの資質・能力」「高士小学校の目指す姿」を共有化し、取り組んできたことが教育課程改善の推進力となった。来年度はPDC Aサイクルを短いサイクルで回し、子どもの学びに着目しながらどのような資質・能力が育まれているかを見取りながら複式カリキュラムの創造を推進していきたい。

## 7 ワーキンググループDによる高士小学校の開設

上越市立宝田小学校 上原 進

### 複式カリキュラムをどう編成するか

複式学級があるということは、職員数が少ないということも意味している。つまり、そこには、次の二つのカリキュラム・マネジメントの課題がある。一つは、今までなかった複式カリキュラムをどう編成するか。一つは、職員数が少ない中で、複式カリキュラム編成のための時間と作業という組織マネジメントをどう展開するか。

高士小学校は、この二つの課題に真摯に向き合い、これから、こうした課題に向き合うであろう学校に対して、多くの示唆を与えてくれている。

#### 1 複式カリキュラムをどう編成するか

複式カリキュラムを編成する際に、高士小学校が配慮したことを整理すると、次のことが浮かび上がってくる。他校が複式カリキュラムを編成する際の着眼点になるのではないかと考える。

##### 「善兵衛学習」複式カリキュラム編成の三つの着眼点

###### (1) 学校全体で育みたい資質・能力を整理する。

グランドデザイン、善兵衛学習全体計画（総合的な学習の時間の全体計画）作成において、新学習指導要領で示された3つの資質・能力を窓口に、子どもたちの実態から学校で育みたい資質・能力を明らかにすることが必要である。

###### (2) 探究課題を2年間トータルで考え、A・B年度にそれぞれのまとまりとして位置づける。

従来、各学年で設定していた総合的な学習の時間における探究課題を、2年間という枠組みの中で考え、それを2つの課題に分けて設定する。ただし、2つの課題に順序性はつけず、どちらの課題から入っても2年間であらうようにすることがポイントである。

###### (3) これまでの体験学習を見直し、A・B年度にメインとなる体験学習を設定する。

探究課題ともかかわるが、中核となる体験活動を各年度に設定する必要がある。高士小学校では、学校運営協議会での協議を踏まえ、教育的価値を吟味しながら、継続すること、取り組む体制を変えること等、体験活動の見直しを進めている。地域を舞台に活動が展開する総合的な学習の時間は、高士小学校のように、地域の意見や考えを積極的に求めることが大切である。

#### 2 組織マネジメントをどう展開するか

複式カリキュラムでは、作成とともに、その運用までをマネジメントしておく必要がある。

##### (1) 作成のためのマネジメント

複式カリキュラム作成に大きな役割を果たしているのが、高士小学校の3つのワーキンググループであり、学年部である。組織をシンプルにし、効率性と機動性を高めている。さらに、研修時間確保のため、月曜6限カットという時間運用も同時に行われていることがポイントである。



## (2) 運用のためのマネジメント

複式カリキュラムは、学年別指導、A・B年度案など、同一学年でも一人の教師が指導したり、同時に二人の教師が指導したりすることが教科によって異なるため、運用の形を決めておかないと機能しない。高士小学校では、その運用を複式授業の構想案として図式化し、全学年の運用パターンが教科ごとに分かるようにしている。

次年度は、善兵衛学習を中核とした複式カリキュラムがどう展開されたのか。そして、そこで学ぶ子どもたちに、どのような資質・能力が育まれたのかを明らかにすることが求められる。

## ○実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
10月	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「資質・能力」育成の観点から、これまでの「知・徳・体」の側面からアプローチし、児童の具体的な姿の共通理解を図る。</li> <li>○カリキュラム作成に係る校内研修（共通理解） <ul style="list-style-type: none"> <li>・全体計画作成のポイント</li> <li>・児童の「目指す姿」の共有</li> <li>・児童の実態を基にした重点項目の選定</li> </ul> </li> <li>○児童の実態を基に、各「資質・能力」の児童の目指す姿を明確化</li> </ul>
11月	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 育成する資質・能力や重点項目の確認、検討</li> <li>○ 総合、生活科全体計画の学年探究課題の確認、修正</li> <li>○ 「善兵衛学習」の年間指導計画作り → 12月下旬まで</li> <li>○ 単式、複式学級についての留意点、授業形態等指導者を交えて確認</li> <li>○ 2か年を見通した研究計画の作成</li> </ul>
12月	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 全職員で「育成する資質・能力や重点項目」の全体像の確認</li> <li>○ 上越教育大学山田智之教授による、「キャリア教育の視点から見た善兵衛学習の在り方」についての講義</li> <li>○ カリキュラム・マネジメントに係る問題点、課題の整理</li> <li>○ R.2 グランドデザインについての検討</li> </ul>
1月	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「善兵衛学習」A、B年度の内容確認、調整</li> <li>○ 地域の「善兵衛学習」講師を交えた年間計画の確認、意見交流</li> <li>○ 地域人材の発掘・整備…CS、育成会、PTAの各団体への協力依頼</li> </ul>
2月	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 令和元年度善兵衛学習の評価</li> <li>○ R.2 グランドデザインについての検討</li> <li>○ 「善兵衛学習リーフレット」の作成</li> <li>○ 来年度の授業形態、学校体制等の検討、確認</li> </ul>
3月	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 重点的に取り組む「資質・能力」に関わる単元を整理し、視覚的カリキュラム表に示す。 <ul style="list-style-type: none"> <li>→ 視覚的カリキュラムR2年度版、R3年度版の作成（A・B年度）</li> <li>→ 「善兵衛学習」を中核に、単元配列の変更や関連単元の視覚化</li> </ul> </li> <li>○ 外部講師による、複式授業の留意点等の研修</li> </ul>

### Ⅲ 実践地域全体としての調査研究の結果明らかとなった成果や課題と改善方策

(○：成果，●：課題) ※課題については、考えられる改善方策も記載すること。

#### 1 調査等からのカリキュラム・マネジメントの取組

〈平成 31 年度全国学力学習状況調査学校質問紙の強肯定評価の割合〉

項 目	上越市立小学校	上越市立中学校
教科等横断的な視点による教育課程の実施	98% (全国比+2.9%)	100% (全国比+8.7%)
P D C A サイクルの確立	98% (全国比+2.6%)	100% (全国比+6.6%)
保護者や地域の人との協働活動 (内外リソースの活用)	100% (全国比+2.1%)	95.4% (全国比+27.9%)

上越市第 2 次総合教育プランに関するアンケートの肯定的評価  
〈令和元年度上越市カリキュラム・マネジメントに関する取組状況〉

項 目	上越市立小・中学校
視覚的カリキュラム表を用いて教育課程を評価・改善した学校の割合	平成 29 年度 100% 平成 30 年度 100% 令和元年度 100%
外部の方とともに視覚的カリキュラム表を活用し、カリキュラム編成や見直しをした学校の割合	平成 29 年度 68% 平成 30 年度 67% 令和元年度 75%

〈令和元年度視覚的カリキュラム表<sup>※</sup>の活用について〉

項 目	上越市立小学校	上越市立中学校
視覚的カリキュラム表を活用し、カリキュラムを評価し、見直しを図った。(年間回数の平均)	平成 29 年度 平均 2.4 回 平成 30 年度 平均 2.4 回 令和元年度 平均 2.2 回	平成 29 年度 平均 2.0 回 平成 30 年度 平均 1.7 回 令和元年度 平均 1.6 回

○P D C A サイクルを確立し、教職員で研修を重ね、教育課程の実施、評価、改善を積極的に行っている。学校によっては、研修会で話し合った内容は、視覚的カリキュラム表に書き込まれ、職員室の廊下や職員室内、研修室等に掲示し、誰でも、いつでも、見られるように工夫している学校もある。

●視覚的カリキュラム表の活用は教職員に限られている実態がある。上越市は全ての小・中学校がコミュニティスクールとなっていることから、社会に開かれた教育課程の具現に向けて会議資料に生かしていくようにする。

●視覚的カリキュラム表の活用が実際に年間 1 回の見直しにとどまっている学校は、小学校 50

校中 11 校、中学校 22 校中 10 校ある。学校課題の共有化や実践の振り返りのため、学校評価と連動し、1 学期末、2 学期末には活用していくようにする。

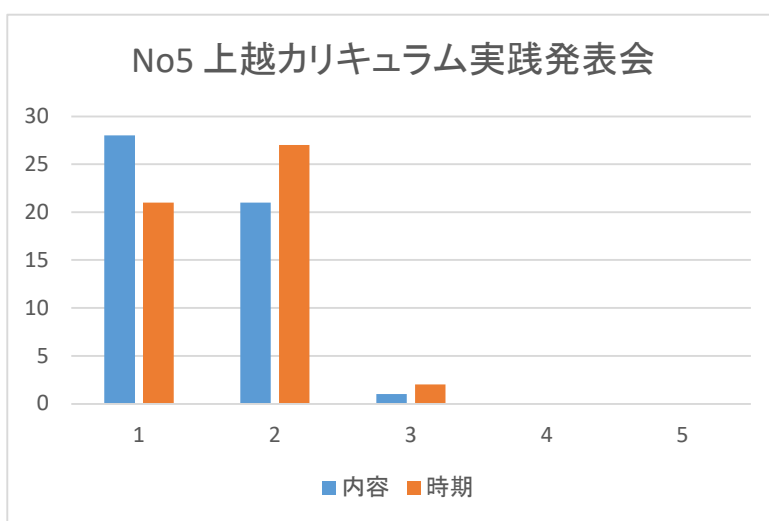
- 新学習指導要領におけるカリキュラム・マネジメント充実に向けた 3 つの側面、「①教科等横断的な視点からの教育活動の創造」「②PDCAサイクルの確率」「③教育課程の実施に必要な内外リソースの確保と活用」の実現は、特色ある学校づくりを推進させていくと考える。地域や保護者の願いや子どもの実態を考慮した学校の自律性を尊重し、今後も特色ある学校づくりを推進する。教育課程や学校の重点課題が視覚化された視覚的カリキュラム表<sup>※</sup>等を活用し、全教職員で取り組んでいくように、ワーキンググループの研究と実践校での成果と課題を市内の小・中学校に広め、実践を促していく。

## 2 実践発表会(第2回カリキュラム・マネジメント検討会議)における参加者の感想

### 参加者 57人

評価	内容	時期
1	28	21
2	21	27
3	1	2
4	0	2
5	0	0
0	0	0
合計	50	50

未提出 7人



<内容> 1大変有意義 2有意義 3どちらとも言えない 4あまり有意義でない 5有意義でない 0無回答  
 <時期> 1大変よい時期 2よい時期 3どちらとも言えない 4あまりよい時期でない 5よい時期でない  
 0無回答

#### <参加者の感想>

- ・教育活動の本質は何か、育てたい生徒の姿は何なのか、学校全体で焦点化しカリキュラムを実践していけるようにしていきたい。
- ・資質・能力を視点にしてカリキュラムの全体像を構想する点が参考になった。これからの地域がどんな学びの場になっていくか将来を見据えて考えるという捉え方も新鮮だった。
- ・各学校が学校課題の解決に向けて特色あるカリキュラム・マネジメントを行っていることが分かった。学校全体で取り組むことで教育活動の質が高まるとともに先生方の力量も高まると考える。
- ・学校課題を明確にして課題解決に向けて全職員がカリキュラム・マネジメントに参加していることが学校経営として学ぶべき点であった。
- ・指導を受けて、どう修正していけばいいのか逆に分からなくなった。

- 実践校の発表は、参加者にとって有益だったととらえることができる。特に時期的に来年度の視覚的カリキュラム表<sup>※</sup>作成時期と重なっていたため実践校の成果を活用することは市内小・中学校のカリキュラム・マネジメントの推進につながる。
- 学校課題の共有化と全ての教職員が意識化することの大切さを感じている感想もあった。今年度の実践校の取組にも表れていることであり、自校の具現の方向にしてほしい。
- カリキュラム・マネジメントの取組に難しさを感じた参加者もいた。このことが前述のとおり、カリキュラム・マネジメントの取組を拒む点であると考え。来年度、11月に予定している実践校の発表会及びカリキュラム・マネジメントの充実に資する手引き「上越カリキュラムハンドブックⅡ」の作成において、分かりやすくカリキュラム・マネジメントに取り組むことの良さを伝えられるようにする。

### 3 実践校の成果と課題から見えてきたこと

〈成果に結び付く取組の共通点〉

- ・教職員全員での学校課題の共有化と改善策の検討
- ・手立てとなる取組の設定「かかわり方スキル」「ESD、SDGs」「善兵衛学習」
- ・視覚的カリキュラム表<sup>※</sup>を活用したカリキュラム・マネジメント研修やカリキュラムの実施評価・改善の定期的な実施
- ・子どもと共に取組を共有し、学校全体で取り組む体制づくり

- 上越カリキュラムにおける取組においても上述と同様の取組が見られた。「全教職委員で」「研修等の計画的な位置付け」の重要性が確認された。
- 実践校の取組には、資質・能力に着目した視点があり、上越カリキュラムの目的である「子どもと生成するカリキュラム」という視点が重要であると考えられる。
- 上越カリキュラムの定義である「上越カリキュラムとは、子どもが示す事実に基づき、実践、評価、改善していくことを重視した広義のカリキュラム」であり、「子どもと生成するカリキュラム」であるということを確認し、実践から見られた子どもの姿をつぶさに見取っていくようにする。子どもが示す事実の蓄積により、これからの時代に求められる資質・能力を見だし、実践に生かしていく教職員の取組が必要だと考える。

### 4 これまでの上越市の取組から今後も生かしていける取組の見だし (ワーキンググループCによる研究)

〈ワーキンググループCによる今後も生かしていける取組〉

- ・「ランドデザインと資質・能力の育成へのつながり」
- ・「教育課程と授業をどのようにつなげていくか」
- ・「地域の財を生かした資質・能力」
- ・「カリキュラムの評価と改善」

これからのカリキュラム・マネジメントにおいても十分生かせる内容であるとしてとらえている。実践校の取組とこれからも生かせる取組を視点にしなが、来年度の成果物である「上越カリキュラムハンドブックⅡ」の内容の検討、作成に取り組んでいく。